

集団の実態分析を生かした中学校における学級づくり

教職研修課 長期研修員 笠原 真智子

1 主題設定の理由

学校において学級とは、学習活動や人間関係形成という目的のために編成された教育組織であり、生活の基盤となる場である。生徒一人一人が安心して生活し、互いに認め合えるような居心地の良い学級であることが大切である。

学級経営研究会の「学級経営の充実に関する調査研究(文部省委嘱研究、平成12年3月)」に、今後取り組むポイントの一つとして「子どもの実態を踏まえた魅力ある学級づくり」が挙げられている。児童生徒一人一人の諸特性や、彼らを取り巻く環境を的確に捉えて行う学級づくりが求められている。特に心の中に抱えていることをうまく表現できないという児童生徒の現状から、児童生徒の内面を探る実態調査を行い、その結果を生かした教育活動を展開する学校が、近年増えてきている。

中学校では、学級担任だけでなく様々な職員が学級の生徒とかがかわっている。従って、中学校において充実した学級経営を行うためには、学年や学校の職員全員の連携が大切になる。その際、日常観察だけでなく客観的なデータとなる質問紙による実態調査を生かして、学年で共通理解を図っていくことが有効である。

しかし実際に今まで実態調査を行っても、分析や活用の仕方がよく分からなかったため、それを生かして学年で連携して取り組むことはできなかった。これまでの経験や日常観察に頼った教育活動を繰り返し、目の前にいる生徒に対して適切な対応ができなかったことがあった。中学校においてより良い学級づくりのために、学年職員で連携しながら生徒の実態分析を生かした適切な教育活動を行うことは重要である。そのことは学級づくりだけではなく、より良い学年づくりにもつながると考える。

以上のことから、中学校において集団の実態分析を活用した効果的な取組を学年職員が連携して進めていくことが、生徒一人一人が安心して生活し、互いに認め合えるような居心地の良い学級づくりにつながるだろうと考え、本主題を設定した。

2 研究の目的

生徒にとって居心地の良い学級にするために、集団の実態分析を生かし、学年で連携して取り組む手だてを整理し、提案する。

3 研究の方法

- (1) 文献等から、学級における実態把握の方法についてまとめる。
- (2) 実態調査を活用した取組を先進的に行っている学校を視察し、その取組を整理する。
- (3) 所属校において行われた実態調査の結果から生徒の実態を読み取る。
- (4) (2)(3)を基に学級や学年で連携して取り組む手だてを整理し、生徒の変容を探る。

4 研究の内容

(1) 学級における実態把握

ア 学級経営における実態把握の方法

生徒一人一人にとって学級が、安心して生活し、成長していく場として機能するために、子供たちの置かれている状況や心の状態を把握しておくことは重要である。

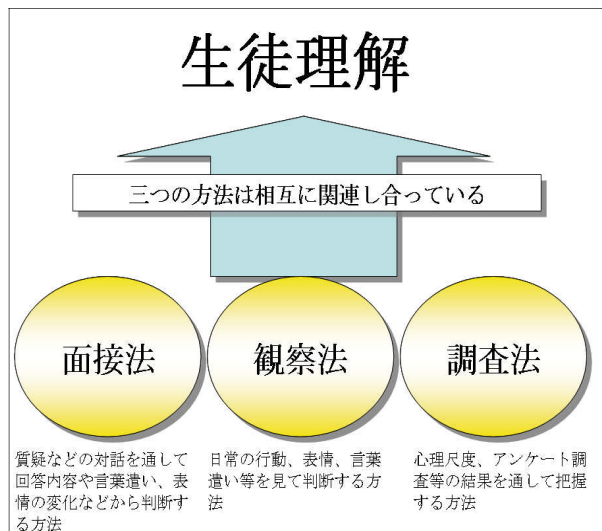
生徒を理解することで、より具体的で適切な対応を生徒個人や学級全体に対して行うことができる。実態を把握するには、ある一つの方法だけで理解するのではなく、いろいろな方法で理解することが大切である。生徒理解においては、直接話したり日記などを活用したりして理解する面接法、日常の様子を観察して把握する観察法、質問紙を使って調査する調査法という三つの方法がある。河村茂雄氏が「観察法，面接法，調査法のどれがいいというのではなく，現在の子どもたちの心理面の理解を深め，そのうえで教師が適切な支援をしていくためには，3つの方法を組み合わせて活用することが求められるようになりました。」(注1)と述べているように、三つの方法をバランスよく関連付けて考えて実践していくことが大切である(資料1)。

生徒の現状では、日常の様子や直接会話だけでは生徒の心理面、行動面の理解が難しく、適切な支援をすることが困難になっている。そのため、生徒の心の状態を質問紙を用いて探る調査法の活用が望まれるようになってきた。学年会議や校内研修などで生徒理解について意見交換する際にも客観的な判断資料として質問紙の調査結果が役に立つと考える。その際には調査法を他の二つの方法と結び付けながら、PDCAサイクルに実態調査(Research)を位置付けたR-PDCAサイクル(注2)で学年や学校の全職員で情報を共有し、組織的に対応していくことが教育効果を上げると考える。

イ 使用する実態調査

現在学校において使用されている実態調査には様々な種類がある。学校独自に作成するアンケートや生徒の心理状態を把握するバウムテスト、生徒の内面を探るエゴグラム等である。学校教育目標や生徒の現状を考慮しながら実態調査を選ぶことが大切である。所属校では、生徒が互いに認め合う居心地の良い学級を目指して教育活動を展開している。そのため、実態調査として学級生活満足度や学校生活意欲度を調査するhyper-QU(注3)を活用している。今回は、その実態調査の分析を生かした手だてを考えることとした。

【資料1】実態を把握する方法



注) 森敏昭、秋田喜代美編著『教育心理学キーワード』(有斐閣)P18~22を基に筆者がまとめた。

(2) Q - Uを生かした先進校の取組

Q - U（注4）の分析を生かした取組の方法を探るため、先進校の取組を調査した。

ア 足立区立蒲原中学校における取組

Q - Uの結果から生徒に必要な援助を把握して個別の支援に活用したり、学級経営の取組を考えたりして人間関係形成能力の育成を行っている。Q - Uの結果について学年ごとに分析を行い、生徒へのサポート体制を検討する。さらに生徒個々への個別支援や学級の実態に応じた構成的グループ・エンカウンターの実施へとつなげている。構成的グループ・エンカウンターについては、学年ごとにそれぞれの時期に合ったエクササイズを例示し、学年が共通で取り組めるよう工夫されている。校内研修会では、これらの取組に対して事例検討会を行うなどして、全教員による協働意識を高めている。以上のような共通実践を通して、教員間の連携も深まり、全校による生徒一人一人の人間関係形成能力の育成に成果を挙げている。

イ 荒川区立第四中学校における取組

ハートフルウィークは、Q - Uを通して生徒一人一人の学級での位置関係や全体の実態を客観的につかみ、その対応について全教職員で話し合い、良い学級・学校づくりの第一歩とするために行われる教育相談期間である。生徒自身の興味・関心を中心とした話題で教職員との会話の時間を作り人間関係を深めている。年に2回、希望する学校の職員と面談を行う。

この取組は、生徒が教職員と1対1で話す面談を通して、自分自身の悩みや考えていることを率直に話すことができると同時に、多くの教職員が一人の生徒にかかわることができるという利点がある。回数を追うごとに生徒の本音が聞かれるようになっていく。ハートフルウィークは、教師と生徒との信頼関係づくりに重要な位置を占めるようになっていく。

ウ 三島市立北中学校における取組

Q - Uを5月と11月の2回実施している。そしてその結果を学級経営、学年経営、特別支援教育における個別支援に効果的に活用している。

Q - Uの結果を受けて、事例検討会を学年ごとに行う。話合いの中で、いくつかの取り組みべき実践方法や活動が出される。そこで出されたことを学級担任がまとめ、学級経営案として作成し、その後の経営に生かしていく。学年末には、学級担任が経営の評価をこの経営案に直接記入して、自らの経営を振り返る。教育目標実現を目指して学校体制で実態把握を生かした取組を行っている。

三つの学校の共通点は、

- ・ Q - Uの分析とその手だてを学校・学年体制に位置付け、組織的に取り組んでいること
- ・ Q - Uを生かした取組について定期的に学年検討会や校内研修会等が行われていること
- ・ Q - Uを生かした取組の年間を見通した計画が作成されていること

である。先進校の取組から学んだことを生かして、分析や具体的な手だてを進めていくこととした。

(3) 実態調査の結果からの読み取り

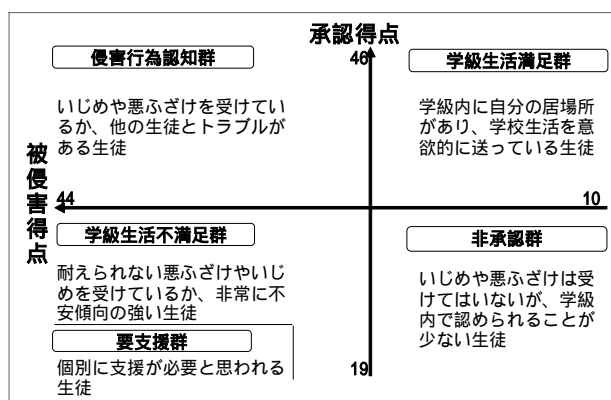
hyper-Q Uは、学級満足度尺度、学校生活意欲尺度（注5）、ソーシャルスキル尺度（注6）の三つから成り立っている。この調査を所属校では、5月と10月の年2回全校生徒を対象に行っている。ここでは第3学年の中で他の2学級と結果の特徴が異なっている1学級（A組39人）に焦点を当てて、学級満足度尺度の結果についてまとめた。

学級満足度尺度は、質問項目が不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けていると感じている度合いを示す被侵害得点と、自分の存在や行動が級友や教師から承認されていると感じる度合いを示す承認得点という二つの領域に分かれている。二つの領域を横軸（X軸）と縦軸（Y軸）にして、生徒一人一人の二つの得点が交った座標にプロットし、学級全体の分布図として表すことで、生徒を四つのタイプに分けて理解することができる（資料2）。右に示したのが、A組の学級満足度尺度の5月の結果の分布図である（資料3）。

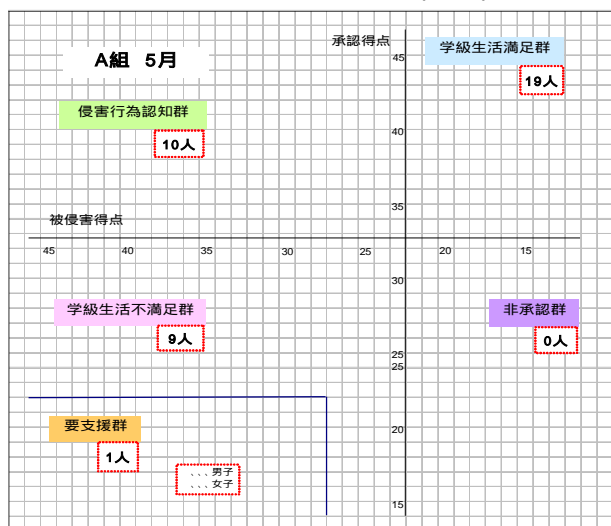
学級担任は学級の様子を「全体的にみんな明るく元気よく生活している」と考えていたが、この分布図を見ると、被侵害得点が高い侵害行為認知群と学級生活不満足群、要支援群に学級の約半数の生徒がいるのが分かった。このことから学級に満足感を抱いている生徒がいる一方で、集団の中には周囲からのいじめや悪ふざけを受けている可能性があったり、集団に不安を抱いていたりする生徒もいることが考えられる。

被侵害得点の質問項目（11～20全10項目）の結果をしてみると、6項目において全

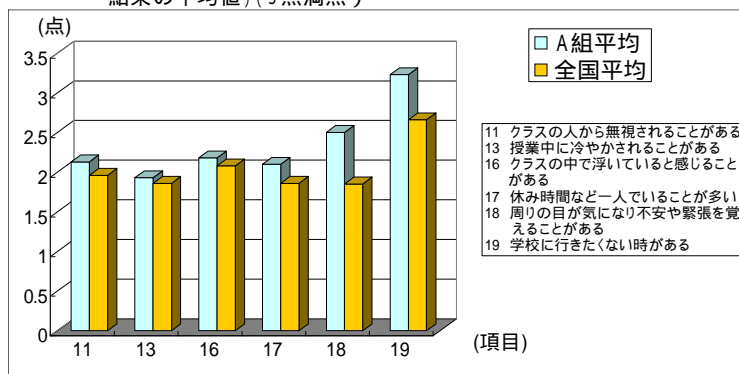
【資料2】学級満足度尺度の分布図の読み取りについて



【資料3】A組学級満足度尺度分布図（5月）



【資料4】学級満足度尺度被侵害得点平均値（全国の値：全国で行われた結果の平均値）（5点満点）



- 11 クラスの人から無視されることがある
- 13 授業中に冷やかされることがある
- 16 クラスの中で浮いていると感じることがある
- 17 休み時間など一人でいることが多い
- 18 周りの目が気になり不安や緊張を覚えることがある
- 19 学校に行きたくない時がある

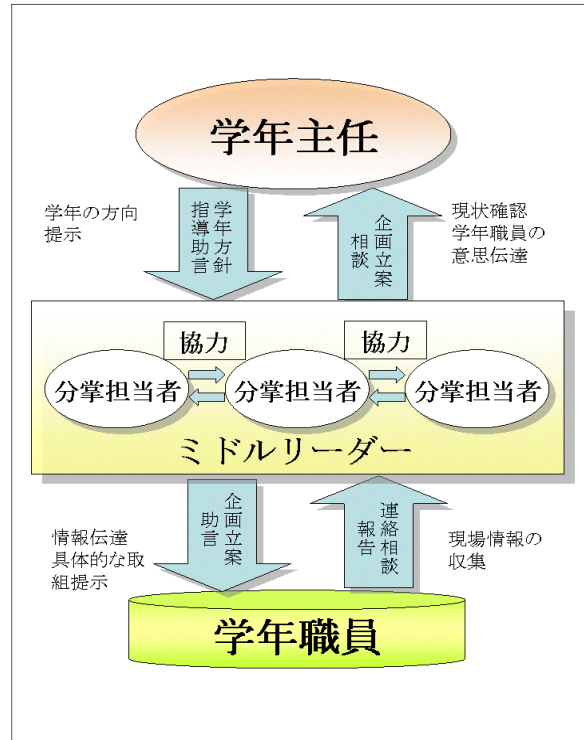
国と比較して望ましくない結果であることが分かった（資料4）。これらの項目から、授業中などにも緊張感を抱いて落ち着いて生活ができなかったり、仲間とうまくかかわることができず不安感を抱いていたりする生徒がいることが考えられる。

(4) 学年で連携して取り組む手だて

ア 分掌担当者（ミドルリーダー）の役割

実態の分析をもとに、組織的な手だてを講じていくためには、学年の組織が縦横ともに高まることが重要である。学年主任は全体の総括的な面においてはその役割を担うが、具体的な実践については、各分掌担当者の存在が重要となる。分掌担当者は実践の企画、立案だけでなく、学年におけるミドルリーダーとして活躍することが望まれる。学年で協力して取り組むためには学年職員間のコミュニケーションの活性化が大切である。そのためにはミドルリーダーの役割が重要となってくる。分掌担当者はミドルリーダーとして学年主任の方針等を職員に伝えるとともに、学年職員の思いを理解し学年主任に伝えていく。また話合いの場において職員一人一人の意見に丁寧に耳を傾けたり、必要に応じて発言を求めたりする配慮も大切となる。また学年の各分掌担当者が、実践内容の確認や日程の調整等において互いに協力し合うことも必要である。

【資料5】学年におけるミドル・アップダウン・マネジメント



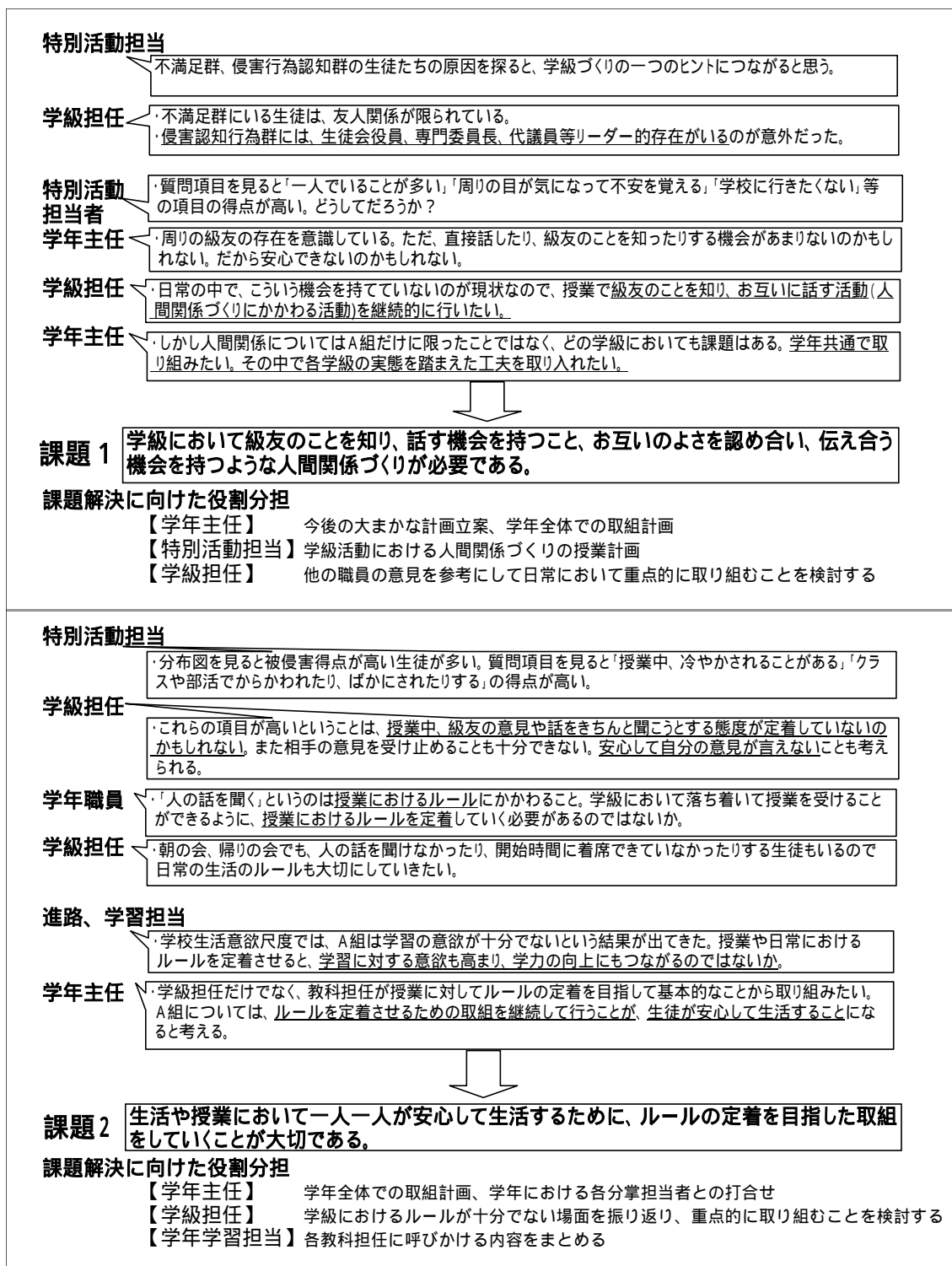
注) 静岡県総合教育センター平成17年度長期研修研究報告書27ページ(資料3)を基に筆者が作成

このように分掌担当者がミドルリーダーとしてリーダーシップを取りながら「ミドル・アップダウン・マネジメント」を進めていくことが、実態分析を生かした取組には大切だと考える（資料5）。

イ 学年検討会での分析

hyper-Q Uの担当者である特別活動担当者が中心となって計画し、会を進めた。事前に特別活動担当者は、学年検討会の計画、学年主任との事前確認、実態調査の内容確認、学級担任（学年職員）への依頼、hyper-Q Uの活用方法の把握を行い、会が効率的に進められるように配慮した。以下に話合いの内容を示した。ここではA組に関する話合いの内容と課題についてまとめた（資料6）。

【資料6】学年検討会の話合い



このように、話し合いにより二つの課題が明らかになった。学年検討会において特別活動担当者が全職員に意見を求めてコミュニケーションの活性化を図る中で、課題が明らかになるとともにそれぞれの課題についての取組の分掌担当までが明確になった。このことが後の活動をスムーズに進めていくことにつながる。

ウ 実態分析を生かした具体的な手だて

実態調査の結果や分析によって明らかになった課題を基に、日々の教育活動におい

てA組に対して学年で具体的な実践を行うこととした。以下に主な実践例をまとめた。

(7) 課題1に対する実践例

特別活動担当者、学級担任が中心となって行う人間関係づくりの授業

どの学級においてもより良い人間関係を築いていくために、静岡県教育委員会発行の「人間関係づくりプログラム」や文献を参考にして構成的グループ・エンカウンターを中心とした授業を行った。基本的には、月1～2回実施した。計画、立案の段階では特別活動担当が中心となり、学年全体に提案した。それを受けて、学級担任は学級の実態を踏まえて内容をさらに工夫して実施した。A組については生徒が安心して生活するために、互いをより知り合い、よさを認め合うことを意識した。人間関係づくりの授業は課題2のルールの確立にもかかわると考えたので、ルールの定着も意識した授業展開を工夫した。

・「何でもバスケット、バースデーライン」(7月)

仲間と楽しめる活動を通して、級友のことを知る機会を得ることをねらいとして実施した。

・「すごろくトークン」(7月)

日頃から一緒に活動する機会の多いグループの仲間のことをより知り、互いに話す機会を持てることをねらいとして実施した。

・「似たものさがし」(10月)

A組において人間関係づくりの授業のウォーミングアップの時間に、制限時間内にグループで協力して活動することで班の連帯感が生まれるこのエクササイズを実施した。

・「私の四面鏡」(10月)

体育大会が終わり、文化発表会(合唱コンクール)に向けて取り組んでいる10月上旬、自分で気付いていなかった自分自身のよさを仲間から伝えてもらうことで、自分を肯定的に受け止め、さらに学校行事や学校生活に対して意欲的に取り組む態度を育てていきたいと考えて実施した。

【資料7】生徒の振り返り(人間関係づくりの授業)

【何でもバスケット】(())は第1回学級満足度尺度結果において属する群を表している。

・今まで知らなかった人のことも知ることができて良かったです。(不満足群)
・こういう大人数でこういうことをすると、少しかしただけクラスの人のことを知り、まとまったり、そしてクラスの協力感を感じるときがある。このクラスに何でなったんだろうかと3か月思っていたけれど、今日少しだけ、ホント少しかしただけこのクラスでもいいんじゃないかと思った。(侵害行為認知群)

【私の四面鏡】

・改めて考えてみるとその人についてどう考えていたか等がよく分かったし、自分についても知ることができたし、良かったと思う。自分に対してのイメージも知ることができたので今後に活かしていきたい。(侵害行為認知群)

・意外とみんな自分のこととかを見ていたんだと思った。人ってみんな見られているんだと思った。(侵害行為認知群)

・他人のいいところを改めて考え直すことができたりしてすごい良かったと思います。(不満足群)

・意外にも、他の人の方が自分では気付かないことや見逃していることを知っていることは気付けた。(不満足群)

・出てくる言葉がいい言葉ばかりなのでとても嬉しい気持ちになった。(侵害行為認知群)

学年主任が行う学年シェアリング

学年行事後、体育館で学年全員が一つの輪になり、行事を振り返りながら互いの思いを述べ合う活動を実施した。会の最後には学年主任がまとめの話をした。

学級担任が行う朝の会、帰りの会の充実、毎日の日記による交流

朝の会、帰りの会において学級担任は自分自身のことについて話し、生徒との距離を縮めるように努めた。また毎日の日記で生徒との交流を大切にしたり、特に、学級満足度尺度で満足群以外に属する生徒に対して生徒の思いを受け止めるように心掛けた。

学年全職員が行う日々の言葉掛け

学年主任を中心とした学年職員が、日々見られる生徒のよい表れをその場で褒めたり、朝打合せで他の職員に伝えて情報の共有化を図ったりするようにした。生徒への温かい言葉掛けを行うように心掛けた。

(1) 課題 2 に対する実践例

学級担任が行う人間関係づくりの授業における工夫

人間関係づくりの授業において、ルールを黒板に明示する、一つ一つの活動時間を細かく設定する、活動形態を工夫する等の取組を継続して行った。

学年学習担当、教科担任が行う授業ルールの定着、授業改善の工夫

授業におけるルールの定着を目指し学年学習担当が中心となって、教科担任に授業の見直しを提案した。教科担任は、授業開始 3 分前には教室にいるようにした。授業開始時には、最初に授業を受けるにあたっての基本的なルール（机をそろえる、教室の床にゴミが落ちているときは拾ってから始める、床にかばんを置いている場合にはロッカーに入れてから始める等）を確認した。学習でも活動時間の細かい設定や、活動形態に工夫を取り入れ、授業を通してルールの定着を目指した。授業後には教科委員にルールを意識した授業評価（3 段階 A～C）を伝えるようにした。生徒は、すべての授業で評価 A を取るために代議員、教科委員が中心となって学級に呼び掛ける活動を行った（オール A 呼びかけ運動）。

【資料 8】生徒の振り返り（オール A 呼びかけ運動の感想）

- ・今日もオール A でした。ここ 2～3 週間ずっとオール A できて、すごいかも。特に保体で A を取ることが一番すごいことだと思う。クラスに団結力が生まれてきて、すごくいいクラスの雰囲気になってきました。
- ・3 週間、オール A でした。すごいさすが！ A 組！ここ 3 週間は授業によく集中できて、成績もいい感じかな。
- ・毎日、取り組んだ成果が出て本当に良かったと思います。これからも続けて声をかけたいです。自分のためにもなりました。

学年集会における学年主任の話

月 1 回行われる学年集会において、A 組だけではなく、学年全体に対して学校生活におけるルールにかかわる話を行い、ルールを守って安心した学校生活を送ることの大切さを伝えるようにした。

エ 生徒の変容－第 2 回 hyper-Q U の結果より

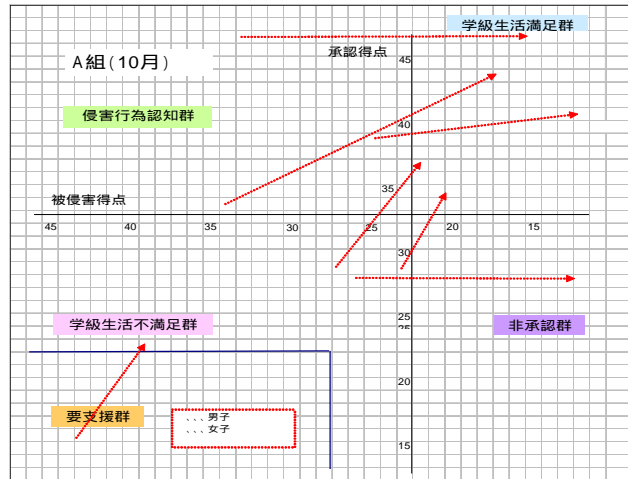
(7) 課題 1 の手だてに対する生徒の変容

所属校で、10 月下旬に第 2 回 hyper-Q U を実施した。学級満足度尺度の分布図の結果を見ると、学級生活満足群に属する生徒は、第 1 回の調査では 19 人（49%）であったのが、第 2 回では 22 人（56%）に増加した（資料 9）。侵害行為認知群に属する生徒について、第 1 回の調査では 10 人であったのに対し、第 2 回の調査では 5

人に減少した。また、第1回の調査で侵害行為認知群に属する生徒10人のうち、8人の生徒の被侵害得点が下がった。また第1回の調査で不満足群に属する生徒10人についても7人の生徒の被侵害得点が下がり、同じく7人の生徒の承認得点が上がった。

8人中6人が不満足群及び侵害行為認知群に属していた学級におけるリーダー的な存在(生徒会、専門委員長、代議員)も、4人が学級生活満足群へと移行した。その生徒の中には日々の学級担任との日記の交流の中で「今回は、いろいろ得られたものがありました。最後に良い経験ができて幸せだと思いました。みんなのおかげです。」(文化発表会後の日記)と述べており、学級の中で前向きにリーダーとして活躍できるようになってきたのが日頃の様子からも分かった。ただ前回不満足群に属していた生徒の中には今回も同じく不満足群に属する生徒がいた。個別の支援が十分でなかったとも考えられるので、今後個別支援の体制を充実させていく必要がある。

【資料9】A組学級満足度尺度分布図(10月)

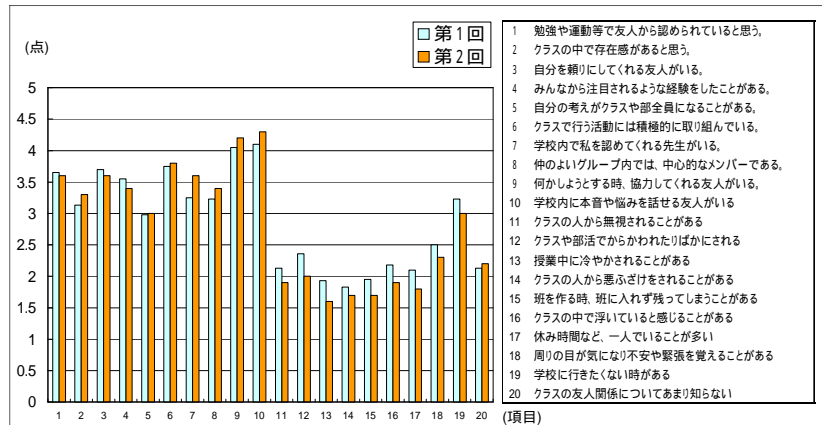


(イ) 課題2の手だてに対する生徒の変容

A組の学級満足度尺度の質問項目の結果が次の通りである(資料10)。第1回と比較すると、承認得点の質問項目(1~10)の平均点は7項目が上回っており、被侵害得点の質問項目(11~20)の平均点は10項目中9項目が下がっていた。特に検討会で挙げられた

【資料10】学級満足度尺度質問項目の変容(満点5点)

「12. クラスや部活でからかわれたり、ばかにされる」(2.36点 2点)
 「13. 授業中に冷やかされることがある」(1.93点 1.6点)の質問項目において0.3点以上減っていた。



また学校生活意欲尺度の調査結果を見ると、学習における意欲が第1回平均得点(満点20点)は14.5点だったのに対し、第2回では15点に上昇していることが分かった。授業において基本的なルールを守り、発表が増える等、意欲的に取り組む姿が見られたり、朝の会・帰りの会において時間を守って進めることができるようになったりと、ルールの定着について日常の様子からも変容がうかがえた。

(ウ) 教員のアンケート結果

11月中旬、第3学年の教員(5人)に取組について記述式アンケートを行った。

アンケート結果を見ると、実態調査を活用したことにより共通理解を持てたり、開かれた学級につながったりするなどの効果がうかがえる。また学年体制で取り組んだことにより、お互いの授業の改善策を見付けるきっかけになった、分掌担当者の役割が明確になった、教員の中に安心感が生まれたなど、成果を感じていることが分かる（資料11）。

【資料11】教員の記述式アンケート結果

- Q. 実態調査の結果を生かして取り組むことはどのような効果があったか
 - ・人間関係をグラフ、図表化してあるので視覚的に分かりやすく短時間理解できた。
 - ・共通理解をすることができるので分掌担当者も計画を立てて、進めやすかった。
 - ・お互いの学級の様子をありのままに出し合えたので、その後の話し合いや活動も有意義に進められた。
 - ・教員が同じ方向を向くことができた。
- Q. 学年体制で居心地の良い学級づくりを目指して教育活動を進めたことについて
 - ・学年で人間関係作りの授業を行ったとき、授業後の教員の話合いで授業や生徒の様子を比較できた。反省したり、次の改善点を見つけたりすることができた。
 - ・課題が共有できたので分掌担当者の役割も明確になった。年間の見通しが立てやすくなった。
 - ・クラスによる差がなくなった。学年全員で生徒を見ることができた。
 - ・担任として安心感を持つことができた。

オ 年間指導計画の作成

今後、学年で取り組むときに実態調査やその結果行われた学年検討会の内容を踏まえた年間指導計画を作成すると、教員の役割もより明確化され、効率よく取り組むことができると考える。そこで今回の取組や文献を参考にして第3学年年間指導計画を作成した（資料12）。

【資料12】 第3学年年間指導計画（案）

章 月	活動担当	活動時間	1章		2章		3章		
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
			Research		Plan	Do		Check	Action
主な学校行事	教務主任		入学式 始業式 家庭訪問	修学旅行 生徒総会	市内総体 定期学力調査 歌おう集会	教育相談	資源回収	始業式 体育大会 志太陸上大会	校内学力調査 生徒会役員選挙 教養音楽会 文化発表会
学年行事	学年主任 分掌担当		学級開き	修学旅行 進路希望調査	学年シェアリング 高校説明会	第2回進路希望調査 高校体験入学 教育相談	高校体験入学 教育相談	第3回進路希望調査 県学力調査 英語スピーチコンテスト	生活体験発表会 文化発表会
学級活動 (人間関係づくり)	特別活動 担当・学級 担任・学級 職員	学級活動	学級開き 学級縦割り作り	修学旅行に向けて 修学旅行に向けて	修学旅行を振り返って (学年シェアリング) 修学旅行アルバム 歌おう集会に向けて	人間関係づくり「何でも バスケット」「パス デザイン」 「学期を振り返って」 人間関係づくり「すごろく トーキング」	日常生活 PDCサイクルを機能させていく。	2学期学級開き (学級職員)	講師による合唱指導 人間関係づくり 「私の四面体」
進路関連	進路指導 担当	学級活動・総合 的な学習 の時間	進路計画を立てよう 「私の夢」 第1回進路希望調査	家庭訪問での進路 相談	進路学習(高校 について) 高校説明会	第2回進路希望調査 公立高校体験入学 教育相談開始	公立高校体 験入学 教育相談	第3回進路希望調 査 見学力調査の振り返り	進路学習「あなたならどうする？」
進路学習 (人間関係づくり)	進路指導 担当	学級活動・総合 的な学習 の時間			「好きな役割」期待される役割	「私が中学校に来る理由、高校へ行く理由」		「待ち合わせ」～上手な伝え方	「あなたならどうする？」
道徳	道徳担当	道徳	明日への出発(1- 即度ある生活態度) 危機を乗り越えて (1- 自主・自律)	訪問(2- 礼儀) 正しい修学旅行(4- 公平) 決まりとは(4- 遵法の精神)	金メダルよりも大切なもの(1- 強い意志) 富士山頂(1- 真実愛・理想の実現) 朝日さす樹海(3- 自然愛・畏敬の念)	学級独自(実態に応じて) 震災の中で(4- 勤労・社会への奉仕) 多いおつり(1- 自主・自律) 私は強くない(2- 感謝・思いやり)	生きは心の中(1- 向上心・個性の伸長) 舞台にかけた青春(3- 人間関係・生きる感情) キャプテン(2- 寛容・謙虚) お母さん、僕が生きて来たら(2- 感謝・思いやり)	監督がくれたメダル(4- 集団生活の向上) 人生の向上(3- 人間関係・生きる感情) 話し合いの内容を生かした学校行事と関連した授業	
総合的な学習の時間	総合的な学習担当	総合的な学習の時間	学年行事	学年行事 学年テーマ学習		個人テーマ学習	体験活動		H T S 学習発表会 準備
A組の日常の取組	A組学級 担任	朝の会、 帰りの会、 日常			「歌おう活動の充実」 歌おう委員会を中心として帰りの会等の歌おう活動を盛り上げる。パート練習を大切にす。	「帰りの会の充実」 生活専門委員会を中心として、帰りの会のスタートがスムーズに行くように呼びかけを行う。帰りの会の中で、様子を報告する。(帰りの会におけるルールの確立)		「オールAを目指そう」 すべての授業において授業評価がAをもらえるように、代議員、生活専門委員、生徒会役員中心に継続的に取り組む。	「オールAを目指そう」 すべての授業において授業評価がAをもらえるように、代議員、生活専門委員、生徒会役員中心に継続的に取り組む。
B組の日常	B組学級 担任	朝の会、 帰りの会、 日常							
C組の日常	C組学級 担任	朝の会、 帰りの会、 日常							

注1) 第1回の学年検討会で話し合ってから決めたことを□、第2回の検討会で話し合ってから修正したり、付け加えたりしたことを■で表した。これは学年主任が書き加える。

注2) 1年間の年間指導計画を作成したが、ここでは紙面の都合上省略した。

作成にあたっての留意事項は、次のとおりである。

(ア) 1年間を見通した年間指導計画

第3学年の1年間を見通して、主に学年共通で取り組むことについて(学級活動、進路にかかわる学習、道徳、総合的な学習の時間)まとめた。より適切な取組を進めるためにhyper-Q Uの分析結果を基に行った学年検討会や定期的な学年での話し合いで出された内容を基に学年主任が修正したり、新たに書き加えたりすることとする。また分掌担当も明記するようにした。

(イ) 学級活動における人間関係づくりの授業

所属校において行っているhyper-Q Uは、個と個や学級と個のかかわり、集団の状態を調べるものである。調査結果を踏まえて取り組むときに人間関係づくりにかかわる授業や取組が重要となってくる。そこで、人間関係づくりの授業を継続的に取り入れていくこととした。

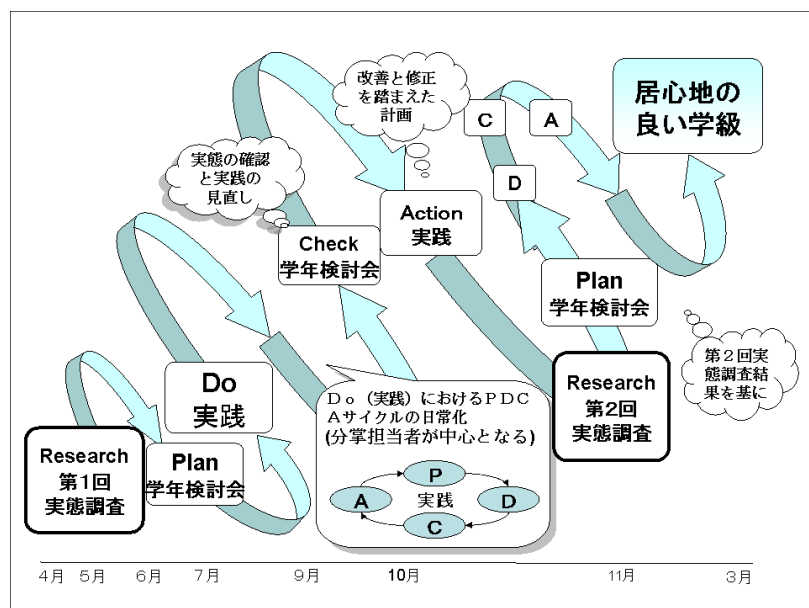
(ウ) 学校行事との関連

1学期は修学旅行、2学期は体育大会と文化発表会と学校行事が行われ、学校生活の大きな流れが学校行事を中心に動いているのが現状である。行事の前後の活動が関連的に工夫されてこそ行事の充実が期待できる。そこで、人間関係づくりの授業において、行事と関連付けた指導を行っていくこととした。内容についても学級の実態に応じて適宜修正を加えることとした。

カ R - P D C Aサイクルにおける取組

実践を進めていく中で、実態分析を生かした学年での取組は、実態調査を基にしたR - P D C Aのサイクルで行っていくことが大切であると分かった(資料13)。実践を行っていく際にも、日常的に各分掌担当者が中心となって、P D C Aサイクルで進めることで更なる充実が図られることが分かった。具体的には火曜日と金曜日に行われる朝の打合せや放課後の短い話し合いの場で分掌担当者を中心に話し合い(Plan)、共通認識の基で実践した(Do)。実践後、生徒の振り返りや職員の感想を通してこれまでの取組を見直し、改善し(Check)、その後の手だてに生かした(Action)。この流れを大切にしながら、具体的に取組を進めていくことが効果的だと分かった。

【資料13】実態分析を生かした取組



5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 文献や先進校の取組を通して理解した実態調査の分析や活用の方をを生かして、学年検討会での話し合いや実践を効果的に進めることができた。実践後に再度行った実態調査を通して、手だての成果を客観的に確認し、その後の取組を改善することができた。学級づくりに実態調査の活用は有効であることが分かった。

イ A組における課題に対する手だてを実践して取り組んだ結果、学年で見通しを持って取り組むためには年間計画作成が大切であると感じ、学年年間指導計画を作成し、提案することができた。

ウ 実態調査を生かして学年で連携して進める取組は、R - P D C Aサイクルの中で取り組むことによって分析結果を生かし、次の課題を見つけることができ有効であることが分かった。

(2) 今後の課題

ア 学級や学年で実態調査を生かす方策に取り組んだが、学校体制において実態調査を生かした教育活動の位置付けをより明確にしていくことも必要である。

イ 本研究では、学年における分掌担当者のミドルリーダーとしての役割について考えてきた。実態分析を生かして学年で連携して取り組むとき、学年主任の立場は重要である。今後、全体を総括する立場の主任のリーダーシップについても考えていきたい。

ウ 今回は、居心地の良い学級づくりを目指して実態調査としてhyper-Q Uを活用した。静岡県教育委員会発行の「人間関係づくりプログラム」にも「人間関係づくりプログラムに係る調査」があり、生徒の人間関係にかかわる実態を把握できるようになっている。今後、この活用についても考えていきたい。

注

- 1) 河村茂雄著『学級づくりのためのQ - U入門』図書文化社,2006年,12ページ.
- 2) 実態調査(Research) - 計画(Plan) - 実践(Do) - 効果検証(Check) - 改善(Action)の頭文字を揃えたもので、取組の流れを表すマネジメントサイクルのことである。
- 3) hyper-Q Uとは、学校生活における生徒個々の意欲や満足感、及び学級集団の状態や集団形成に必要な対人関係を営むスキルが生徒にどの程度身に付いているかを質問紙によって測定するものである。
- 4) Q - Uとは、生徒個々の状態および学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料を提供することを目指した診断尺度である。Q - Uにソーシャルスキル尺度が加わったものがhyper-Q Uである。
- 5) 学級満足度尺度は、現在の学級集団の状況や子供たち一人一人の様子や満足度を把握し、学校生活意欲尺度は、生徒の学校生活における意欲や適応度の高低を把握する調査である。5 : とてもそう思う ~ 1 : 全くそう思わないの5段階で評価している。
- 6) ソーシャルスキル尺度とは、学級集団において人とかわりを持つための技術を調査するものである。4 : いつもしている ~ 1 : ほとんどしていないの4段階で評価している。

参考文献

- ・堀裕嗣著『学級経営力を高める』, 明治図書, 2005年.
- ・堀内一男著『子どもの居場所を創る学校』, 東京教育研究所, 2007年.
- ・片野智治編集代表『エンカウンターで進路指導が変わる』, 図書文化社, 2007年.
- ・河村茂雄編著『グループ体験による学級育成プログラム』, 図書文化社, 2001年.
- ・河村茂雄著『Q - Uによる学級経営コンサルティングガイド』, 図書文化社, 2002年.
- ・河村茂雄著『学級づくりのためのQ - U入門』, 図書文化社, 2006年.
- ・河村茂雄、小野寺正己、粕谷貴志、武蔵由佳、NPO日本教育カウンセラー協会企画編集『Q - Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 中学校編』, 図書文化社, 2007年.
- ・河村茂雄・粕谷貴志著『公立学校の挑戦〔中学校〕』, 図書文化社, 2007年.
- ・河村茂雄著『hyper-Q U - コンピュータ診断資料の見方・生かし方』, 図書文化社, 2008年, 4 - 5 ページ.
- ・河村茂雄著『Q - U 中学・高校用 実施・解釈ハンドブック』, 図書文化社, 2008年.
- ・小島宏編『新編 学級経営読本』, 教育開発研究所, 2008年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる 中学校編』, 図書文化社, 1996年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる 中学校編 part 2』, 図書文化社, 1998年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる 中学校編 part 3』, 図書文化社, 1999年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学校を創る』, 図書文化社, 2001年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 part 2』, 図書文化社, 2003年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターとは何か 教師が学校で生かすために』, 図書文化社, 2004年.
- ・森敏昭、秋田喜代美編著『教育心理学キーワード』, 有斐閣, 2006年, 18 - 22ページ.
- ・長瀬荘一著『学校ミドルリーダー その役割と心得』, 図書文化社, 2001年.
- ・西村佐二著・帆足文宏編著『図解学校経営』, 東洋館出版社, 2005年.
- ・落合良行著『中学三年生の心理』, 大日本図書, 1998年.
- ・下村哲夫監修・高階玲治編集『主任の仕事 学校組織活性化マニュアル』, 1995年.
- ・下村哲夫監修・編『主任の仕事 学年経営の実務マニュアル』, 明治図書, 1996年.
- ・吉澤克彦・中村雅芳編『エンカウンターで学級づくり12か月 中学校3年』, 明治図書, 2006年.
- ・財団法人学校教育研究所編『学級経営の現代的課題』, 学校図書, 2004年.
- ・静岡県「人間関係づくりプログラム」作成委員会『人間関係づくりプログラム』, 静岡県教育委員会, 2008年.
- ・静岡県総合教育センター『平成17年度長期研修員研究報告書』, 2006年, 25 - 36ページ, 杉村享美「組織を活性化させるミドルリーダーの在り方 - 特別活動主任の取組を通して -」.
- ・視察研修資料 荒川区立第四中学校(2008年), 足立区立蒲原中学校(2008年), 埼玉大学講師別所靖子氏(2008年), 三島市立北中学校(2008年).